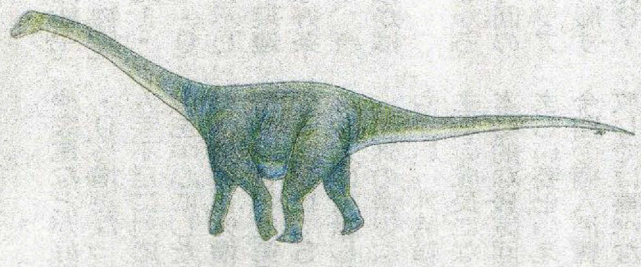
山陽新聞　2017年8月25日
1　17版　第48237号　明治25年3月17日第3種郵便物認可

世界最大級足跡化石の恐竜

〝がに股〟でのろのろ

岡山理科大、モンゴルで共同発掘

昨年、世界最大級の恐竜足跡化石が出土したモンゴル・南ゴビ県で24日までに、それに連なる3個の足跡化石が見つかった。大型植物食恐竜「竜脚類」とみられる計4個の足跡が詳細に観察でき、歩行など生態の解明が期待される。岡山理科大（岡山市北区理大町）と、モンゴル科学アカデミー古生物学地質学研究所による共同発掘隊が発見した。



ティタノサウルス類の想像図。巨大な体を支えるため、がに股でのろのろと歩くことが分かった

新たに3個発見し判明

発掘地点はモンゴルの首都ウランバートルから南へ約600キロのゴビ砂漠南東部のシャルツァフ近郊。昨夏の調査で白亜紀後期（約7千万年前）の地層から、直径1メートルを超える足跡化石が見つかり注目を集めていた。今回は周辺を掘り進め、同じ地層から3個の化石を発見。形状や配置から同一個体の足跡と判断した。

化石は全て後ろ足で、前足の跡を踏みつぶして歩いたためとみられる。足跡の直径は102～112センチ。推定全長は30メートルで、竜脚類でも大型のティタノサウルス類の可能性が高い。足跡のくぼみにたまった砂が固化し、立体的な「凸型化石」として残った。

今回の発見で、進行方向に対し爪が極端に外側を向く特徴的な歩き方が判明。歩幅は約2メートルしかなく、発掘隊の日本側隊長を務める石垣忍・同大教授（古生物学）は「かなりの〝がに股〟超大な体重を体の外側へ分散していたようだ。歩幅から時速2～3キロと推定され慎重にのし歩いた様子が思い浮かぶ」という。

岡山理科大は林原（岡山市）の恐竜研究事業を引き継ぎ、2015年からゴビ砂漠で発掘調査を行っている。今夏の調査は28日までの予定。足跡化石のほか、希少なハドロサウルスの幼体、胸から首がつながった竜脚類の化石なども見つかっている。

（稲垣心也）

石垣教授らが発掘した4個の足跡化石。進行方向（上）に対し爪が大きく外側を向く